

## 「兄エサウとの再会に備える」

2021年04月26日

ヤコブは祈った。「父アブラハムの神、父イサクの神、『生まれた地、親族のもとに帰りなさい。私はあなたを幸せにする』と言われた主よ、私はあなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受けるには足りない者です。かつて私は杖だけを頼りにこのヨルダン川を渡りました。しかし今や私は二組の宿営を持つまでになりました。どうか、兄エサウの手から私を救ってください。私は兄が怖いのです。兄が私を、母親も子どもたちも殺しにやってくるのではないかと恐れています。」(創世記 32 章 10 節～12 節)

ヤコブは故郷に近づき、兄エサウとの再会をする時が迫っていた。ヤコブはエサウから長子の特権を奪い、父イサクからの祝福をも騙し取った。エサウは父が亡くなった日に、ヤコブを殺すと怒りを爆発させていた。そのエサウと再会するのである。怒りが収まっているとは思えない。まずヤコブはエサウに使いの者を送り、あなたの僕であるヤコブは、ラバンの元に身を寄せ、今に至りましたが、牛とろばと羊の群れ、男女の奴隷を持つようになりました。このことを主人エサウに報告し、ご好意をいただきたく使いの者を送りましたと言わせた。使いの者は帰って来て、エサウはあなたと会うために 400 人を引き連れて、こちらに向かっていると報告した。ヤコブは、これを聞いて、400 人を連れてくるのは、自分たちを皆殺しにするためだと、震え上がった。そこで、一組が襲われても、一組は難を逃れるために、一族の者、羊、牛、らくだなどの家畜を二組に分けた。そして、切々と祈った。「父アブラハムの神、父イサクの神、『生まれた地、親族のもとに帰りなさい。私はあなたを幸せにする』と言われた主よ、私はあなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受けるには足りない者です。かつて私は杖だけを頼りにこのヨルダン川を渡りました。しかし今や私は二組の宿営を持つまでになりました。どうか、兄エサウの手から私を救ってください。私は兄が怖いのです。兄が私を、母親も子どもたちも殺しにやってくるのではないかと恐れています。」エサウから救われたいという祈りは、真剣そのものであった。ここでヤコブは、神の慈しみとまことを受けるに足りない者であると謙遜しながらも、あなたは「生まれた地、親族のもとに帰りなさい。私はあなたを幸せにする」また、「あなたの子孫を、多くて数えることができない海辺の砂のようにする」と、故郷への帰還と子孫への祝福を約束されたのですから、その約束を実現させてくださいと祈っている。神は私たちを愛していると言われる。ならば、愛しているように取り計らってくださいと、神に責任を負ってもらえるよう、祈ってよいということである。

ヤコブは魂を注ぎ出して祈り、その夜を過ごした。そして、自分が得た財産の中から、エサウへの宥めの贈り物を選び出した。雌山羊 200 匹と雄山羊 20 匹、雌羊 200 匹と雄羊 20 匹、らくだ 30 頭とその子、雌牛 40 頭と雄牛 10 頭、雌ろば 20 頭と雄ろば 10 頭である。膨大な家畜を、エサウへの贈り物として用意した。それらの家畜を群れ毎に分け、群れと群れの間に距離を置いた。襲われた場合、逃亡する時間を確保するためである。そして、先に行く者に、エサウに会い、あなたはどこの者か、どこへ行くのか、家畜の群れは誰のものかと聞かれたら、あなたの僕ヤコブの家の者で、主人のエサウ様に差し上げるもので、ヤコブも後から参りますと言いなさいと命じた。ヤコブは、人の心の邪悪さ、物に対する欲望の強さを知っている。贈り物を先に行かせ、エサウの怒りを宥めてから、顔を合わせれば、赦してくれることを期待した。しかし、赦してくれる確証は全くない。その夜、まんじりともしないで、自分の宿営で一夜を過ごすことにした。心騒ぐ一夜であった。